

日本英文学会関東支部
第9回（2014年度夏季大会）
プログラム

日時：2014年6月21日（土）

会場：成城大学（7号館）

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

アクセス

小田急線「成城学園前駅」下車徒歩3分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5291-1922

E-mail:kanto@elsj.org

12:00 開場・受付開始 (7号館1階)				
		第一会場	第二会場	第三会場
		712教室	713教室	714教室
12:15 13:30	研究発表	コミュニケーション能力を養う文学教材の利用 ——音読劇 Readers Theater)で文学作品を読み進める	Douglas Jerroldの散文作品を再考する ——Street literatureとヴィクトリア朝小説の交差	<i>The Old Curiosity Shop</i> における4つのネットワーク ——移動興行者、金融業者、街の噂、血縁集団
		発表者) 南山大学短期大学部教授 浅野享三	発表者) 東京女子大学非常勤講師 中妻結	発表者) 青山学院大学大学院 四戸慶介
		司会) 明星大学准教授 高橋和子	司会) 青山学院大学准教授 田中裕介	司会) 上智大学教授 新井潤美
	ワークショップ (711教室)	World Café”による教育現場での読書体験の共有		
		発表者) 群馬大学准教授 草薙優加		
		発表者) 鶴見大学准教授 深谷素子		
		発表者) 成蹊大学准教授 小林めぐみ		
13:40 15:40	英米文学部門 シンポジウム (721教室)	ユーロピア/ディスピア再考——歴史、ジェンダー、共同体		
		(司会・講師) 津田塾大学准教授 秦邦生		
		講師) 東京大学准教授 武田将明		
		講師) 実践女子大学教授 稲垣伸一		
講師) 専修大学専任講師 佐久間由梨				
13:40 15:40	英語教育部門 シンポジウム (722教室)	英語教育における<児童文学>の活用と実践——メディアの有効活用を中心に		
		司会・講師) 関東学院大学教授 奥聡一郎		
		講師) 帝京科学大学准教授 淡路佳昌		
		講師) 東洋学園大学准教授 下山幸成		
講師) 文京学院大学准教授 フェアバンクス香織				
16:00 18:00	メイン シンポジウム (732教室)	21世紀批評におけるレトリックの可能性——ポール・ド・マンの歴史的意義		
		司会) 和洋女子大学教授 佐久間みかよ		
		講師) 慶應義塾大学准教授 高橋勇		
		講師) 成蹊大学教授 下河辺美知子		
		講師) 慶應義塾大学教授 巽孝之		
講師) 千葉大学教授 土田知則				
18:15 20:00	懇親会 (7号館地下1階食堂)			

開場・受付開始 (12:00 より 7号館1階にて)

12:15-13:15

【研究発表】

第一会場 (712 教室)

(発表者) 南山大学短期大学部教授 浅野 享三

(司会) 明星大学准教授 高橋 和子

コミュニケーション能力を養う文学教材の利用
——音読劇 (Readers Theater) で文学作品を読み進める

文学作品を通じて人間の営みを考え、将来の糧を学ばせ、音読劇 (Readers Theatre) で作者のメッセージを聴衆に伝えることでコミュニケーション能力を養う方法について発表する。外国語 (英語) が受験や資格獲得のために学ばれるとすれば、外国語教育の果たす役割は極めて不十分である。様々な事情から文学作品が現代の受験や各種テスト対策に不向きな面があるとしても、文学作品は教材として不適切であるはずがない。受験準備の制約がない大学でこそ積極的に利用すべきである。一方で、かつての大学講読英語のようなイメージで文学作品を扱えば英文和訳授業を繰り返し、「話せるようになりたい」という学生の願望に応えるのは困難である。これまでのままでは、グローバル化に対応した英語教育改革の行く末は、伝える中身のない英語教育に終わると危惧する。今こそ十分な読解と理解に基づき、自ら解釈した作者のメッセージを自分の英語で伝える教育が高・大を問わず求められている。

第二会場 (713 教室)

(発表者) 東京女子大学非常勤講師 中妻 結

(司会) 青山学院大学准教授 田中 裕介

Douglas Jerrold の散文作品を再考する
——Street literature とヴィクトリア朝小説の交差

Douglas Jerrold (1803-1857)は、劇作家として大衆から人気を博し、雑誌の編集者、劇、スケッチ、小説、論説の作家、そして Dickens や Thackeray らと交流の深い文化人として 19 世紀前半に活躍したが、その死後、特に散文作品は文学の本流から外されてきた。しかし、Jerrold の散文作品を、ヴィクトリア朝前後の大衆向け street literature の、とりわけ犯罪を扱ったブロードサイドと、その先にある *Newgate Calendar* や *Newgate* 小説といった歴史的な文脈の中で見ると、大衆向け読み物と文学の本流である小説が交差する場としての存在感を放つ。

本発表では、特に *Mrs Caudle's Curtain Lectures* (1845)に焦点を絞って、一見犯罪とは関係のない、がみがみ女の滑稽な独白調連載読み物であるこの散文作品が、公共の場に晒される媒体であるブロードサイドの死刑囚の声を、個人の私的な内面を描く小説的機能の中に内包していることを

分析することで、Jerrold 作品を再評価することを試みる。

第三会場（714 教室）

（発表者）青山学院大学大学院 四戸 慶介

（司会）上智大学教授 新井 潤美

The Old Curiosity Shop における 4 つのネットワーク ——移動興行者、金融業者、街の噂、血縁集団

The Old Curiosity Shop でディケンズが仕掛けた「視線」の効果は、主要な登場人物たちを単に「見る側」に留まらせず、同時に「見られる側」にも位置づける。語りはネルの目線を通して逃避行の途中で出会う様々な興味深い人々を読者に紹介するだけでなく、彼らの目線から観察したネルたちの姿も読者に提供しているのである。他者から見られることで捏造あるいは暴露されてくるネルと老人の情報を、ディケンズは4種類の異なる視点から扱っている。ひとつは移動興行者間による情報ネットワーク、次に金融業者としてのクイルプの持つ情報管理、そして街の人々の噂、最後に血縁集団による繋がりである。この発表では、ネルと老人の逃避行というイベントにおいてディケンズが用いたこれら4種類の視点がどのような歴史・社会・文化的背景を持つのかを考察し、本来は私的な事柄であったトレント一族の内情がいかにして外部に引き出されていくのかを検証する。

12:15-13:30 711 教室

【ワークショップ】

“World Café”による教育現場での読書体験の共有

（発表者）群馬大学准教授 草薙 優加

（発表者）鶴見大学准教授 深谷 素子

（発表者）成蹊大学准教授 小林 めぐみ

World Caféとは、カフェが提供するようなリラックスした雰囲気の中で、立場や主張にとらわれず自由に意見を述べ合い「集合知」を生み出す話し合いの手法である。本ワークショップでは、クラス全員が同じ本を読んだ後にWorld Caféを行い、相互交流を促進し、読書コミュニティを創出する活動を体験してもらおう。学習者の声も紹介し、ワークショップ参加者が教育現場でこの活動をどう援用できるか共に考えたい。

13:40-15:40 721 教室

【英米文学部門シンポジウム】

ユートピア／ディストピア再考——歴史、ジェンダー、共同体

(司会・講師) 津田塾大学准教授 秦 邦生
(講師) 東京大学准教授 武田 将明
(講師) 実践女子大学教授 稲垣 伸一
(講師) 専修大学専任講師 佐久間 由梨

“People can speak of Utopia much more easily than of the next day’s duty; and yet when that duty is all done by others, who so ready to cry, ‘Fie, for shame!’”——この引用は、エリザベス・ギヤスケルの産業小説『北と南』(1855)に登場する工場主ジョン・ソーントンの、オックスフォードの学究ミスタ・ベルとの会話における言葉である。日々の工場運営とストライキの問題に対処する(公正ではあっても厳格な)経営者のソーントンにとって、「ユートピア」など学者の空論に過ぎないように思われたのだろう。「有能な」実務家と「無能な」理想家の対立という構図——現代においては、いかなるユートピア論もまずこの難題に直面せねばならない。このような分断を前にしてユートピアを語ることの困難は、テロ、戦争、そして、未曾有の災害が続く21世紀の私たちの時代経験によって、さらに深刻化しているようにも思われる。

他方、現代日本の小説家いとうせいこうは、東日本大震災の経験を前にして「未来を考える想像力を封じられている」との思いを抱いた、と印象的に述懐している。しかしながら、この困難に正面から向き合うことこそが、逆説的にも16年ぶりの新作『想像ラジオ』の執筆へと彼を駆り立てたようだ。彼は、「想像力が復活する装置として、文学は使える」と語っている(2013年11月12日の朝日新聞掲載のインタビュー記事より)。

それでは、「未来を考える想像力を封じられている」私たちの時代に、英米における長いユートピア表象の伝統は、想像力を復活させるためのどんな貢献ができるだろうか。本シンポジウムでは、18世紀から20世紀に至るイギリスとアメリカにおけるさまざまなユートピア(思想、実践、詩、小説)を検討し、そこからさらにできれば、広い視野で、現代においてユートピアを考えること自体の問題と可能性を考えてみたい。(秦)

■ 神意、理性、一般意志——フウイヌムランド再訪

武田 将明

スウィフトの『ガリヴァー旅行記』第四篇は、すでにユートピア／ディストピア文学として論じられて久しい。理性ある馬の住むフウイヌムランドは、ジョージ・オーウェルによる批評をきっかけに、しばしば全体主義と関連づけて考えられてきた。しかしこれまでの研究は、全体主義的なフウイヌムランドを本当にスウィフトが理想郷と見なしていたのか否かを争うか、さもなければ古代ギリシャや旧約聖書の世界まで思想的な源泉を遡るものが多く、フウイヌムランドの表象が近代以

降の政治に対してもつ批評性を十分に解き明かしたとはいえない。

本発表では、フウイヌムランドを近代政治の文脈で再読するための手がかりを、まず十八世紀初頭の政治状況に求める。当時すでに議会制民主主義の限界が問われており、スウィフトやデフォーの政治に関する発言は、これを念頭において読み返す必要がある。すると、デフォーが『ロビンソン・クルーソー』などの著作で繰り返し説いた「神意」(Providence)も、『ガリヴァー旅行記』第四篇にしばしば登場する「理性」(Reason)も、のちにルソーが『社会契約論』で展開した「一般意志」(volonté générale)に通じており、さらに「一般意志」に対するバートランド・ラッセルやハンナ・アーレントの批判によって、全体主義の問題にもつながることが分かる。

以上の知見を踏まえ、本発表はフウイヌムランドにおける全体主義的な要素を再検討し、さらに民主主義の限界や歴史の修正という、今日にも通じる政治問題が寓意という形式で批評された理由についても、可能なかぎり考えてみたい。

■ 結婚制度のオルターナティブを求めて——シェイカーとオナイダ・コミュニティ

稲垣 伸一

19世紀アメリカのニューヨーク州、あるいは同州を中心とする広い地域で、ユートピア的生活共同体を形成した二つのグループが、一般社会における結婚制度とは異なる制度を実践していた。その一つのグループがシェイカーと呼ばれるイギリスに起源を持つキリスト教の一派で、もう一つがオナイダ・コミュニティである。両者はそれぞれ独身主義と、一種の重婚制度と言える「複合婚 (complex marriage)」を採用して、既存の結婚制度に代わる男女関係のあり方を提示した。独身主義と複合婚は一見正反対の性格を思わせるが、両グループは女性の健康やコミュニティ内での地位を意識した点で共通の特徴を持っていた。他方、独身主義と複合婚はいずれも本能的な欲望を抑えて初めて可能になるものだったため、シェイカーとオナイダ・コミュニティは寡頭的な指導体制により厳格に管理・運営されていた点でも類似していた。

この二つのグループが結婚制度に代わる選択肢を提示した背景には、同じ19世紀半ばに女性解放運動やフリーエ主義者のコミュニティ運動がともに結婚制度の現状を批判していたことや、さらに時代を遡ってキリスト教信仰復興運動「第二の覚醒 (the Second Great Awakening)」の影響も考えられる。本発表では、こうした時代的背景をまず簡単に確認した上で、南北戦争以前のシェイカーとオナイダ・コミュニティに共通するフェミニズム的側面と管理主義的側面を指摘したい。そして最後に時間が許せば、ホーソーン二つの短篇で描かれたシェイカーのコミュニティについても検討してみたい。

■ 黒人詩、ホモエロティシズム、ユートピア

佐久間 由梨

これまで黒人文学がユートピアという文脈において論じられることは多くはなかった。しかし、人種・性差別にあふれる現実社会 (いま・ここ [now / here]) のオルターナティブとなるような、いまだ到来せぬ世界 (どこでもない [nowhere]) を探究するという意味において、黒人文学は常にユ

ートピア的であったともいえる。ルイ・マランはユートピアが「トポグラフィ」ではなく「トピック」であること、すなわちユートピアが修辭的・詩的な操作により生み出される言語の領域にあると論じている。本発表は、詩的言説によりまだ見ぬ世界——ユートピア——を想像／創造した黒人詩人たちに光をあてていきたい。

とくに注目するのは Langston Hughes、Georgia Douglas Johnson、Alice Dunbar-Nelson、Carrie Williams Clifford などの世紀転換期からハーレム・ルネサンス期にかけて活躍した黒人詩人たちの恋愛詩である。ときにホモエロティックな世界観に彩られる恋愛詩には、自己と恋人とが結ばれ、融合し、想像上の別世界へと旅立つ願望が表現されている。なぜ恋愛詩は、そしてとくにホモエロティックな関係性は、いま・ここにある世界とは異なる別世界の痕跡をしるしているのか。いかに恋愛詩は読者をいまだ到来せぬ世界へと誘うのか。本発表は、これら問への答えをみいだすべく、いくつかの詩を精読し、味わってみたい。

■ 「黄金郷」の向こう側——『1984年』におけるディストピア空間のスタイル

秦 邦生

第二次世界大戦中のジョージ・オーウェルは、H. G. ウェルズの楽観的なユートピア像を批判し、実現可能な社会主義のために、ユートピア主義との切断を唱えていた。対照的に戦後のあるエッセイのなかで彼は、ワイルドやモリスなどの「不可能を要求する」ユートピアに、「理想」を想起させる役割を認めて一定の評価を与えている。ここに見られるオーウェルのゆらぎは、第二次世界大戦から冷戦への移行期にあつて、イギリス的社会主義の理想と帝国主義の現実とに引き裂かれた彼自身の政治的困難と連動している。彼の「ユートピア」に対する両面的評価は、当時のグローバルな地政学の観点から再考されねばならない。

この文脈を踏まえて本発表は、典型的な冷戦型ディストピアとして受容されることの多い『1984年』を再読する。この小説は、超大国によって世界が三分割され、各個が自閉した一党独裁国家の悪夢を描いているが、主人公のウィンストンが経験するオセアニアの都市は（意外にも）不均質な空間を多く残している。この物語における諸空間の葛藤は、希望と絶望の単純な二項対立ではなく、一連の二律背反——〈外部〉と〈内部〉、〈自然〉と〈テクノロジー〉、〈グローバル〉と〈ローカル〉など——の徴候として再解釈すべきかもしれない。

このようにこの小説を、植民地主義やグローバリズムの文脈におけるユートピア表象の歴史性と関連づけるとき、なにが見えてくるだろうか。この観点から本発表は、オーウェルのディストピア像のなかに込められた逆説的なユートピア性を明らかにしてみたい。

13:40-15:40 722 教室

【英語教育部門シンポジウム】

英語教育における〈児童文学〉の活用と実践——メディアの有効活用を中心に

(司会・講師) 関東学院大学教授 奥 聡一郎
(講師) 帝京科学大学准教授 淡路 佳昌
(講師) 東洋学園大学准教授 下山 幸成
(講師) 文京学院大学准教授 フェアバンクス 香織

私たちの身の回りには、絵本、翻訳、映画など様々な英米の児童文学作品があふれかえっている。これらの児童文学作品を英語教育の教材として活用しようという試みは、目新しいものではないが、本シンポジウムではメディアの活用を軸に、新しい視点から大学や中高での実践例を紹介したい。教材活用としての理論的背景や、具体的な作品における社会的文化的背景を考察し、どのようにメディアを活用していくかをフロアとの情報交換を交えながら、よりよい方法を共有していければと考えている。

■ 教育的文体論から考える教材としての児童文学

奥 聡一郎

本シンポジウムでは、広義の児童文学作品の定義を概観し、マザーグースや絵本、翻訳、映画など子供が親しんでいる作品を教材として扱うことをまず、前提とさせていただきたい。

まず理論的背景として、「果たして児童文学は子供にとって読みやすいのか」という問題を提起し、リーダビリティやコーパスの視点から、児童文学作品の言語的な特徴を明らかにしてみる。そして、具体的な実践の枠組みを教育的文体論に求めながら、表現の分析を中心とした言葉への気づきを促す言語活動をいくつか紹介し、教材としての児童文学作品の選択や活用にどのようなアプローチが可能かを考えてみたい。

■ 中学校段階での多読指導と文学作品

淡路 佳昌

前任校である東京学芸大学附属世田谷中学校での実践を紹介する。

世田谷中学校では、検定教科書を中心とした総合的な英語指導を周辺から支える柱として、多聴や多読、英語日記などの活動がカリキュラムに組み込まれている。このうち、多読指導は中2の後半から導入される。はじめは文章の極めて少ない絵本から取り組ませて、楽しみながら読み進める感覚をつかませる。その後いわゆる Graded Reader シリーズを読み始める。多読用教材には、文学作品のリライト版の他、ドキュメンタリーやオリジナルのストーリーなどがあるが、生徒に人気が高いものは同世代の子どもや学校を舞台にしたオリジナルのストーリーであった。

この傾向は中3になっても同様であったが、その背景には中学生としての英語力の制約以外に、文学作品をリライトする難しさ、ノンフィクションで要求される語彙の幅広さが影響していると考え

えられる。

■ トレーニング教材としての児童文学

下山 幸成

児童文学作品は、文学としてだけでなく、付加価値のあるトレーニング教材としても活用できる。付加価値とは英語らしいリズムや対象言語学的視点などを導入しやすいことを意味する。例えば、マザーグースであれば、様々な音変化に焦点を当てた発音トレーニング教材として活用できる。絵本や童話であれば、音読指導だけでなく、日本語版と英語版を比べることにより、主語の扱いや動詞の時制の扱いなど文法指導教材としても活用できる。また、一見難しそうな構文でも、童話に出てくる表現を使って指導するとわかりやすい指導ができることもある。

本発表では、児童文学作品の英語版を使って大学生に対して行っている指導の中から、マザーグースを使った発音指導、「親指姫」などを使った文法指導、「赤ずきん」などを題材にして読み聞かせ動画を作成するスピーキング指導を中心に報告する。

■ 教室の中の「シンデレラ」——児童文学作品における人種・ジェンダー・エスニシティ

フェアバンクス 香織

児童文学作品や絵本には、その国や時代の特徴、さらには当時の社会情勢や価値観などがさまざまな方法で内包されている。ディズニー映画で知られる『シンデレラ』(1950)を一例に挙げれば、グリム童話を含む原作と比較することによってディズニー作品の特徴やウォルト・ディズニー社の企業戦略を浮き彫りにすることができる。また『シンデレラ』を、それ以降に公開された他のディズニープリンセスと比較することによって、アメリカにおける女性観やフェミニズムの動向を窺い知ることができるだろう。児童文学を題材に、生徒や学生の異文化理解を深めることは十分に可能なのである。

芸術形態の一つとしての児童文学・絵本とは異なり、教育目標によって柔軟にその色合いを変える“教室の中の「シンデレラ」”——実践に結びつけることを念頭に、その可能性を多角的に検証したい。

16:00-18:00 732 教室

【メインシンポジウム】

21世紀批評におけるレトリックの可能性——ポール・ド・マンの歴史的意義

(司会) 和洋女子大学教授	佐久間 みかよ
(講師) 慶應義塾大学准教授	高橋 勇
(講師) 成蹊大学教授	下河辺 美知子
(講師) 慶應義塾大学教授	巽 孝之
(講師) 千葉大学教授	土田 知則

北米における脱構築批評の領袖ポール・ド・マンが亡くなって 30 年。奇しくも、近年その主要な著作が紹介・翻訳され、『思想』（岩波書店）2013 年 7 月号で全面特集が組まれた。言語の自律性を示し「読むこと」の倫理と取り組んだド・マンの仕事が、今、脚光を浴びるのは、21 世紀を迎え激動する世界と対峙し「テキスト」を読む私たち文学研究者が、文学と現実をつなぐレトリックを吟味し、研究・教育の現場へと還元すべき時が到来しているからである。そこで、本シンポジウムでは、ド・マンを思想家ならぬ文学批評家として再評価し、脱構築の歴史的意義について、文学研究および批評理論をリードする 4 人の講師に、それぞれの視点で大いに論じていただく。

■ コールリッジにおける主体と超自然

高橋 勇

『ロマン主義のレトリック』序文（1983年）に、そこに収められた諸論文が 1956年以降25年にわたって書きためられたものであると述べられているように、ロマン主義研究はいわばド・マンの出発点であったが、その中心的主題はやはり比喩的言語／言語の比喩性である。イギリス文学からはワーズワス、シェリー、イェイツに多くの紙幅が割かれている一方で、ド・マンの「象徴」と「アレゴリー」に関する論を思い出せば、ここにコールリッジの出る幕のないことは容易に想像がつくだろう。しかし果たしてド・マンとコールリッジの仲をこのままにしておいてよいものだろうか。

ド・マンとともにコールリッジを読もう—これを合言葉に、本発表ではわざわざ「文学的／文学としての」と名づけられた『文学的自叙伝』と、ワーズワスによる『抒情民謡集』序文との応答を出発点として、コールリッジの詩作における「超自然」的イメジャリーを取り上げ、ド・マンが批判した意味作用の恣意性を意識的に前提とした「ジャンル」の可能性を検討してみたい。

■ 地球という惑星とポール・ド・マン

下河辺 美知子

「脱構築は 1980 年末までに衰退した」という見方をすれば、現在の批評と 80 年代の批評との間には何のつながりもないことになる。本発表では、この二つの時間の間に見えない脈絡があるという仮説の中で、その源流にポール・ド・マンがいる可能性を検証してみたい。バーバラ・ジョンソン、ショシャナ・フェルマン、キャシー・カルース、シンシア・チェイスたちの仕事には、ド・マンが実演した言葉との絡み合いが各々の別の形で埋め込まれていたが、本発表では、21 世紀批評を牽引するガヤトリ・スピヴァクのレトリックにおけるド・マン的なるものを考えてみたい。スピヴァクは、自らの存在を「カントーシラー—マルクスド・マン」という軌道を経たものであると述べているからである。「自分にとって最も支えとなったド・マンの教えは“parabasis”という物語である」というスピヴァクの言葉を検証するために、ド・マンの使う displacement や turn (*Allegories of Reading*)、shift (*Blindness and Insight*) といった概念を再考することで 21 世紀批評の本質にあるド・マン的なるものを考えてみたい。

■ ニクソン政権下の脱構築

巽 孝之

ド・マンの歴史的転回点を数え上げるのは難しくない。第一に、戦後 1946年に祖国ベルギーからアメリカへ移住する時点。第二に、1966年にジョンス・ホプキンス大学で開かれた会議でデリダと初邂逅を遂げる時点。第三に、1979年、脱構築批評の代名詞『読むことのアレゴリー』を刊行した時点。そして第四に、没後の 1987年、戦時中の反ユダヤ的言説が喧伝される時点。

だが、アメリカ文学思想史の点から再確認するならば、もうひとつ重要なポイントが見過ごされがちであった。1963年ケネディ大統領暗殺以降、ヴェトナム戦争が終息していく十年間においてポストモダン文学は円熟期を迎えるが、それはド・マンが理論的再検討を図っていた時期に相当する。しかも、マーティン・マッキランも指摘するように、1973年から74年の間、すなわちウォーターゲート事件でニクソン大統領が失脚していく二年間は、ド・マンがチューリッヒにて『読むことのアレゴリー』の原型のひとつ『テキストのアレゴリー』を執筆していた時期と合致する。この時代をもうひとつの重要な転回点として見直す作業は、今日における修辞的批評の可能性および不可能性を再検討する意味でも不可欠と思われる。

■ ポール・ド・マンのルネ・ジラール批判が示唆するもの

土田 知則

ポール・ド・マンは1967年にプリンストン大学で開催された「ガウス・セミナー」の初回講義をルネ・ジラルールの著作『ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実』（1961年）への言及から始めている。ド・マンはそこでジラルールの「三角形的欲望」の議論に寄り添いつつ、幾つかの重要な批判を展開している。ロマンティックなものに否定的なジラールと、その可能性を追究しようとするド・マン。そこにはそうした対立図式が一応確認されるが、双方の間には反転的対称性とでも表現すべき奇妙なねじれが潜んでいる。それはプルーストの小説を読む二人の姿勢に明確に現れている。物語の始まりを虚無と捉えるジラール。始まりにこそすべてがあると主張するド・マン。ここには、彼らが互いの立論を「媒体」にしたことから生じた興味深い転倒と相同性が見て取れる。「盲目」と「洞察」が両者共通の鍵概念であったこと。そのことの意味が今改めて問われていると言えるだろう。

懇親会（18:15-20:00）

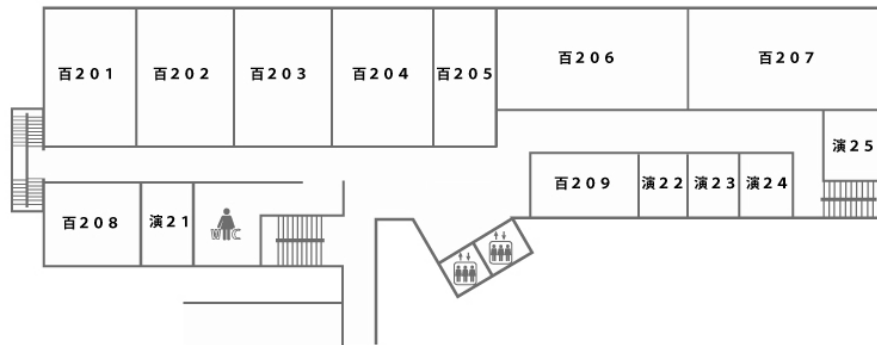
会場 成城大学 7号館地下1階食堂

会費：4,000円（学生2,000円）

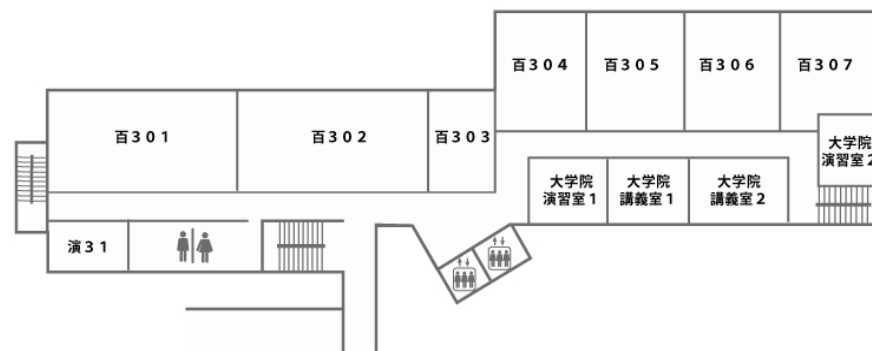
事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

会場マップ

百年館低層棟 2 F



百年館低層棟 3 F



会場アクセスマップ

最寄り駅から

- JR 山手線「目白」駅
徒歩：約 15 分
【都営バス（学 05）】
日本女子大学前行
【都営バス（白 61）】
新宿駅西口行、または
ホテル椿山荘東京行
- 東京メトロ副都心線
「雑司が谷」駅（3 番出口）
徒歩：約 8 分
- 東京メトロ有楽町線
「護国寺」駅（4 番出口）
徒歩：約 10 分

